

# こころを夢を ギターに託して 歌い続けたい

「丹波さんの歌を、涙を浮かべながら聞いてくれる人、主婦でもやればできるんだ、やっていいんだ」「丹波さんが足跡を作ってくれた。やってくれてありがとう」と喜ぶ若い世代……丹波さんの作るメッセージソングは、多くの人々に感動を与えています。なぜ彼女の歌はこんなにも人々の心を打つのでしょうか？ご自宅で、今日までの体験を伺いました。



**Profile 丹波恵子**  
たんばけいこ  
 南陽市出身。中学時代からギターを愛し、音楽活動を続けて今日に至る。子育て中に一時活動を休止するが、家族や友人の支えを得て活動を再開し、今も大きく羽ばたき続けている。

## 音楽活動の後ろに 見えていた支え

三人の子どもを授かり、子育て中は音楽活動を断念せざるを得なかった丹波さん。  
 それでも、三人目の長女が小学校に入学したら活動を再開しようと思つて、子ども達が寝静まってからギターを弾き作詞活動をする日々を過ごしていたという。

そんなある日、市報を見ていたら北部公民館でフォークソングのコンサートが開催されることを知った。歌手の名前に見覚えあり……  
 はやる心を抑えきれず、子ども達を預

けて会場へ。その女性歌手は知人ではなく別人だったが、公演終了後、「音楽活動を再開したいと思つているんです」と胸の内を話したところ、「思つたことは積極的に自分から行動すべき。絶対やるべきよ！」と後押しされ、次回のコンサートは二人でやることに。

しかし、公演直前になって、静岡在住であるその女性歌手は都合で来県できなくなってしまう。

復帰後初めてのコンサートに一人きり……。不安もあつたが、子育てをしながら知り合い、語り合った友人との、数々の悩み事を織り込んだ歌を披露する事に決めた。  
 当日、泣きながら自分の歌を聞いてい

## 再開の決断と 家族の後押し

結婚生活や子育てなどを理由に仕事をやめてしまった女性が「仕事を奪われた」と言うのを聞くと、残念に思うという。

「私は、実名で仕事をするにあたって、自分が全ての面で責任を取るといふ決断をしながら、本気で活動するには家族の協力を得るべきだと考えました。そこで、家族に相談を持ちかけて協力をお願いしました。夫は、『やるよ』と決めているのだらう。やるなどは決して言わない。やる人なのだから、やるほうがいいよ』と嬉しい言葉をくれました。」

さらに子ども達も「いいことだよ。素敵だよ。体に気をつけて頑張つてね」と

大賛成。そのうえ当時小学6年生だった長男からは、「自分が持つているものは世の中に発信すべきだよ、遠慮しないでいいよ」と力強く嬉しい応援の言葉。  
 「活動は生半可な気持ちではできません。家族に迷惑はかけられない。」「きちんと行動するからね」と約束しました。」

## 音楽活動を通して 見えてきた「女性」の悩み

知名度が高まり、婦人会などのセミナーに呼ばれて女性の声を聞くことも多くなった。そうした中、ある会合で、「結婚して、子育てして、家事をこなし、漬物をつけたり……。そんな中で買い物、旅行、茶飲み会なんてとんでもない！」

る友人の姿が目に入った。公演終了後も、知らない人から「すごくよかった」「歌詞をちょうだい！」と次々と感想を伝えられ、やってみてよかった……と嬉しく思つたという。  
 そのときは「主婦がこんなことしていいのかなあ」という思いもあり家族を呼ばなかったが、義母に「聞きたかったよ」と言われ、頃あいをみて2度目のコンサートを開催することに。  
 義母がコーラス活動をしていることもあり、音楽に対する理解があることや、夫や実家からの協力も得ることができたことなどから、多くの友人達の協力も得て暖かな結束力のもと、感動的なコンサートとなった。

という女性の存在を知る。

女性としての力を発揮したいのに、何気ない行動もはばかれるという実態。それに対して丹波さんは、こんなアドバイスをするという。

「女性が何もかもこなしてしまうと、男性は頼りきってしまいます。自分一人ではできないからと、男性にも協力を求めなくては。」

そこには、丹波さん自身も女性の立場で感じた「悩み」があつた。  
 「結婚して妻、そして嫁。子どもを産んで親……  
 人って何なんだろう。主婦として家事や育児に追われる自分を見つめたとき、社会から取り残されているような不安に陥つた。」

「長年持ち続けた夢で社会に参加したい」  
 その願いを叶えるべく、丹波さんは家族特に夫に協力を求めたのだという。丹波さんの夫は、結婚前から音楽活動に理解があり、仕事に対して協力的だった。

「だから、私は音楽を続けることができるんだ」と彼女は言う。  
 「今、こうして音楽活動ができるのは、この人との縁があつたからこそ。感謝の気持ちでいっぱいです。そして、義父（おじいちゃん）・義母（おばあちゃん）にも感謝です」

その顔は笑顔で満ちあふれている。頭ごなしの頼み方ではなく、言い方・頼み方を工夫してみた方がいいですね、とアドバイスもくれた。

家族総出の参加と協力のおかげで、徐々にコンサートの依頼が舞い込むようになったが、それに応えるということは家を留守にするということ。難しい問題だが、そこも「家族の理解」が解決してくれた。  
 「音楽活動があるから元気な母さんでいられるんだ」と、子ども達は丹波さんが母親として、主婦として気を使いながら活動をやっているのを充分知ってくれている。むしろ、「そこ止まりでいいの？東京に出て本格的に音楽活動してみたら？」なんて応援もしてくれた。  
 だから、「私は歌と家庭を両立したいの。お母さんも頑張っているのだから、あなた達も頑張つてね」と言えた。



「女性が輝くと、男性は元気になるのよ(笑)」

## 思いを伝えよう

シンガーソングライターとして活躍する丹波さんは、よく「歌があるからいいよね」と羨ましがられるという。でも、「音楽活動を一生懸命にしているからこそ、たくさん応援してくれる人が出てきてくれるのです。本気で何かに取り組んでいるものはありますか？」と問いかけます。

「今まで取り組んできたこと、興味のあることに真剣に取り組めば、周りの人は理解してくれます。自分が発信することによって、周りが変わってきてくれるのがわかるんです。自分が変われば相手も変わるとよく言われますが、なかなかすぐには変わらない。でも、思いは伝わっているんです。不平不満を言っている暇があるのなら、自分の世界を広げていって、世の中に発信していきましよう。」

(編集協力員 今野 久子)



写真左  
 山形県内で平成17年に使用された中学2年生の道徳副読本。丹波さんの生き方が歌とともに掲載されました。

写真右  
 丹波さん作成のCD。コンサート終了後に、CDが欲しいと言われるようになったのがきっかけ。下はその収録曲の一部です。

たった一言で人をきずつけて  
 素知らぬ顔をしてるより  
 不器用だけれど「ごめんね」と  
 一言いえる人が私は好きです  
 何ができるとか何が一番だとか  
 自慢してる人がすごいんだろうか？  
 やれるとこまでやったんだぞと  
 満足できる事のほうが必要だと思う  
 (「存在人(そんざいびと)～必要といわれる人～」より歌詞抜粋)